

Public Interest Incorporated Foundation for Shiretoko Institute of Wildlife Management

設立財団ニュースレター

Vol. 19

2019年12月27日発行

■□■ 知床ネイチャーキャンパス 2019 ■□■

「現場で学ぼう！知床の課題解決にチャレンジ」を開催しました

知床自然大学院大学設立財団は、2019年9月7、8日と11～13日の5日間、世界自然遺産知床を舞台とした教育プログラム「知床ネイチャーキャンパス2019」を開催しました。野生生物保護管理分野の第一線で活躍する先生方に講師を務めていただき、講義、実習、ワークショップ、オープンキャンパス（地元発表会）を行いました。4回目の開催で、初めてオンライン講義を実施しました。

<事前オンライン講義>

開催月日 2019年9月7日（土）、8日（日） 13:00～18:00

<知床実習>

開催月日 2019年9月11日（水）～13日（金）

開催場所 演習・宿泊：ホテル知床（北海道斜里町ウトロ香川37）

実習：知床世界遺産地域内と周辺の野外フィールド（斜里町）

オープンキャンパス：北こぶし知床 ホテル&リゾート（斜里町ウトロ東172）

参加者 受講生：24名（大学生19名・大学院生3名・社会人2名）

講師（敬称略） 愛甲哲也（北大大学院農学研究院准教授） 石川幸男（弘前大学白神自然環境研究所教授）

ト部浩一（道立総合研究機構さけます・内水面水産試験場主査）

敷田麻実（北陸先端科学技術大学院大学教授） 石名坂豪（知床財団主任研究員）

野別貴博（知床財団主任研究員）

高橋満彦（富山大学人間発達科学部教授）

村田良介（知床財団理事長）

中川 元（当財団業務執行理事）

Teaching assistant：2名（大学院生1名・社会人1名）



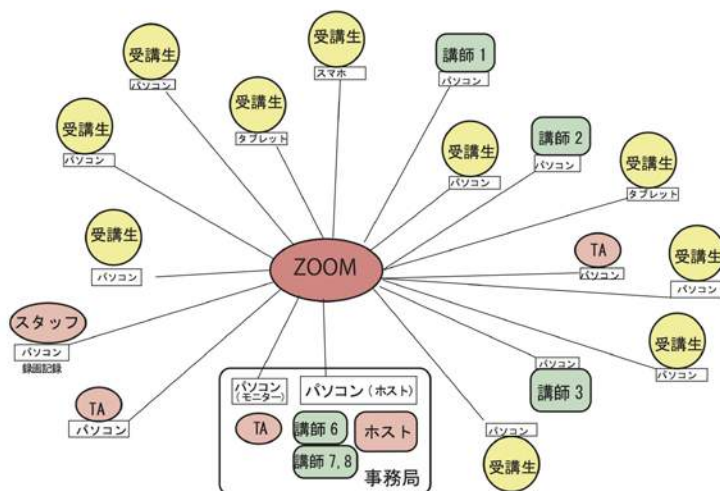
事前オンライン講義

	時間帯	プログラム	講師	内容	
9月7日 (土)	13:30～14:00	開講挨拶とオリエンテーション	(主催者)	挨拶・オリエンテーション・講師紹介	オンライン
	14:00～14:50	講義1 自然環境と開拓・保護の歴史	中川元	自然の特徴と世界遺産登録、開拓・開発の歴史、保護の歴史	
	15:00～15:50	講義2 森林再生	石川幸男	運動の経過と森林再生の方法、生物相の復元、課題	
	16:00～16:50	講義3 知床100㎡運動の歩みと課題	村田良介	知床100㎡運動の課題と未来、運動地の公開	
	17:00～17:50	講義4 河川生態系の復元	卜部浩一	森川海の繋がり、ダム改良とサケ科魚類、生物相の復元	
9月8日 (日)	13:30～14:20	講義5 ヒグマと人をめぐる現状と課題	石名坂豪	知床のヒグマと人の行動、対策の現状と課題	オンライン
	14:30～15:20	講義6 野生動物と法制度	高橋満彦	野生動物に関する法制度、自然公園と利用に関する法制度	
	15:30～16:20	講義7 野生動物と人との共存	愛甲哲也	野生動物と利用者、知床ヒグマ管理計画と共存の実現	
	16:30～17:20	講義8 実習・演習への導入	敷田麻実	実習演習へ・講義から課題を考え実習を経て提案発表	
	17:20～17:50	オリエンテーション(現地実習について)	(主催者)	現地プログラムへのオリエンテーション	

知床ネイチャーキャンパス 2019 は、9月7、8日の事前オンライン講義からスタートしました。

Zoom アプリを使い、全国各地の受講生と講師がオンライン上の講義室に集合。

初の試みでしたが、大きなトラブルもなく、2日間にわたる8講義で知床の現状や課題を詳しく学びました。



講義 1 知床の自然環境と開拓・保護の歴史

中川 元 理事

知床の自然がどう形づくられ、どのような生物が生息しているのか。背か自然遺産にとらえられた理由からその特徴を解説。保護と開拓がせめぎあった歴史や地元自治体の産業など、人と自然との関わりの基礎知識を学んでもらいました。

講義 2 森林再生—知床の取り組み—

石川 幸男 先生

1997年から始まった知床100㎡運動の自然再生運動。原始の森と、自然生態系の循環の再生を目指していますが、エゾシカの増加などさまざまな問題に直面。試行錯誤を繰り返す森林再生の取り組み・現状について解説しました。



講義 3 知床 100 m 運動の歩みと課題

村田 良介 先生

全国の支援者によって支えられている知床 100 m 運動について、社会科学的な視点から、運動のはじまり、盛り上がり、危機（国有林伐採問題）などをお話いただきました。現在の取り組みや将来に向けた課題についても解説いただきました。

講義 4 河川生態系の復元—森川海の繋がり—の再生

ト部 浩一 先生

知床の多様で希少な生態系は、森川海の繋がりによって維持されていること。サケマスやオショロコマがその役割を担い、河川工作物（ダム）改修で河川生態系復元が進行中であることを解説。イワウベツ川やルシャ川の事例も詳しくお話いただきました。

講義 5 ヒグマと人をめぐる現状と課題

石名坂 豪 先生

農作物や漁業被害、観光客やカメラマンの問題行動など、知床のヒグマと人をめぐるさまざまな軋轢を紹介。出没地域とクマの行動によって対応内容を決める知床のヒグマ対策（知床半島ヒグマ管理計画）についても、詳しくお話いただきました。

講義 6 野生動物と法制度

高橋 満彦 先生

なぜ野生生物を守るのか？なぜ生物が必要なのか？根本的な考え方をかみ砕いてお話いただいたほか、野生生物保護管理の基本となる法律（鳥獣保護管理法や自然公園法など）を解説。法の観点から、野生生物と人との共存を考えました。

講義 7 野生生物と人との共存

—観光客・住民との距離

愛甲 哲也 先生

知床や札幌で行った観光客や市民の意識調査から、ヒグマとの望ましい距離、餌付けに対する態度などに考え方の違いがあることを紹介。多様な市民の認識に基づく情報提供や啓発、コミュニケーションの必要生をお話いただきました。

講義 8 バックカスティングでいこう、知床の未来のデザイン

敷田 麻実 先生

最初に理想状態を描き、その後解決に必要な方法を考える「バックカスティング」の概念を解説。「知床の課題解決にチャレンジ」と題したプログラムで、最終的な提案作成に必要なチームの役割分担、議論のプロセスなどを学びました

講師及び現地実習指導（敬称略）

愛甲 哲也

北海道大学大学院農学研究員院准教授
知床世界自然遺産地域科学委員会委員
(適正利用・エコツーリズムWG、ヒグマ・エゾシカWG委員)

石川 幸男

弘前大学白神自然環境研究所教授
知床世界自然遺産地域科学委員会委員
しれとこ 100 平方メートル運動・森林再生
専門委員会議座長

ト部 浩一

北海道立総合研究機構さけます・内水面水産
試験場主査
知床世界自然遺産地域科学委員会河川工作物
AP 委員

敷田 麻実

北陸先端科学技術大学院大学教授
知床世界自然遺産地域科学委員会委員（適正
利用・エコツーリズム WG 座長）専門は地
域資源戦略など

石名坂 豪

公益財団法人知床財団 主任研究員
(保護管理部長)・博士(獣医学)
大型哺乳類の保護管理に従事

野別 貴博

公益財団法人知床財団 主任研究員
(海洋河川事業係長)・博士(水産科学)
知床の魚類調査や保護管理に従事

高橋 満彦

富山大学人間発達科学部教授
知床世界自然遺産地域科学委員会適正利用・
エコツーリズム WG 委員
専門は環境法・野生動物法

村田 良介

公益財団法人知床財団理事長
前斜里町教育長、斜里町環境保全課長、知床
博物館学芸員などを歴任。環境行政・教育行政
に長く携わる

中川 元

公益財団法人知床自然大学院大学設立財団
業務執行理事・元知床博物館長
知床世界自然遺産地域科学委員会適正利用・
エコツーリズム WG 委員

実習指導

秋葉 圭太 (公益財団法人知床財団公園事業係長)
松林 良太 (公益財団法人知床財団自然復元係長)
笠井 文考 (知床アルパ株式会社・当財団理事)
ほか、地元管理機関の皆様

TA

池上 美穂 (雨宮印刷株式会社 羅臼営業所長・
前知床羅臼町観光協会事務局長)
船木 大資 (筑波大学大学院世界文化遺産学専攻)

知床実習のプログラム

	時間	プログラム	講師・指導者	内容	場所	
9月11日 (水)	8:15~8:45	受付	(主催者)	受講者受付	ホテル知床・ロビー	
	9:00~9:20	開会	(主催者)	主催者挨拶・オリエンテーション	ホテル知床・講義室	
	9:20~10:50	アイスブレイキング	TA・各講師	参加者自己紹介、グループ分けとテーマ設定	ホテル知床・講義室	
	11:00~12:30	実習1 森林再生の現場-1	石川幸男 松林良太 (卜部・石名坂・野別)	森林再生の現場訪問	100㎡運動地	
	12:30~13:20	昼食			現地(ハウス周辺)	
	13:20~15:30	実習2 森林再生の現場-2			100㎡運動地	
	15:30~17:40	実習3 ヒグマとの共存-1	秋葉圭太・笠井文考 (卜部・石川・石名坂・野別)	知床五湖のヒグマ共存現場で管理システム体験	知床五湖	
	18:00~19:00	夕食			ホテル知床・レストラン	
	19:20~20:30	ゼミ	各講師・TA	グループ単位で今日のまとめ	ホテル知床・講義室	
	20:30~22:00	交流会			ホテル知床・講義室	
9月12日 (木)	7:00~8:00	朝食			ホテル知床・レストラン	
	8:30~12:30	実習4 河川生態系の復元 実習5 ヒグマとの共存-2	卜部浩一 野別貴博 石名坂豪	河川工作物の改善、生物相の復元 人とヒグマの実例と関係考察 観光客とカメラマンの問題、安全対策・現場対応	岩尾別川流域	
	12:30~13:30	昼食			ホテル知床・講義室	
	13:30~17:30	実習6 関係機関・担当者聞き取り	各機関と各講師	遺産センター(環境省)、森林保全センター(森林管理局)、 自然センター(財団)、ホテル知床(斜里町)	ウトロ周辺の各機関	
	18:00~19:00	夕食			ホテル知床・レストラン	
	19:20~21:00	ゼミ	敷田麻実 各講師・TA	ワークショップの導入・進め方	ホテル知床・講義室	
9月13日 (金)	6:30~7:20	朝食			ホテル知床・レストラン	
	7:40~9:00	実習7 サケの河川遡上・鮭水揚げ	卜部浩一 野別貴博 (各講師)	サケ科魚類の自然遡上と産卵環境、鮭水揚げ見学	ベレケ川・ウトロ漁港	
	9:00~12:00	演習1 (各講師)	敷田麻実 各講師・TA	ワークショップ (グループワーク・ディスカッションとまとめ等)	ホテル知床・講義室	
	12:00~12:50	昼食			ホテル知床・講義室	
	13:00~17:00	演習2 (各講師)			ワークショップ (グループワーク、まとめ、パワポ作成、発表準備)	ホテル知床・講義室
	17:00~17:30	振り返り			アンケート記入他 記念撮影	ホテル知床・講義室
	17:50~18:30	夕食			ホテル知床・レストラン	
	18:30~18:50	移動				
	19:00~20:30	オープンキャンパス(演習3)	各講師・TA	発表と講師講評・地元住民とのディスカッション	北こぶしホテルリゾート	
	20:30~21:30	交流会	(主催者)	受講生・講師・地元住民・関係者の交流	北こぶしホテルリゾート	
21:30~21:50	移動					
9月14日(土) 8:30より終了セレモニー 8:45解散					ホテル知床・ロビー	

知床実習 1 日目 (9 月 11 日)

事前オンライン講義で学んだ受講生が知床に集合しました。アイスブレイキングやチーム分けの後、知床 100 m 運動地へ出発しました。この日は森林再生の現場で自然再生の現状や課題、知床五湖でヒグマとの共存、管理システムについて学びました。

実習 1、2 森林再生の現場 (知床 100 m 運動地など)

最初に知床 100 m 運動ハウスで運動の歴史を学び、実際の運動地では、石川先生からエゾシカ柵を前に食害対策についてお話を伺ったり、原生林と二次林の植生の違いなどを肌で感じて学びました。



実習 3 ヒグマとの共存-1 (知床五湖)

多くの観光客が訪れるヒグマの生息地、知床五湖。あいにくの雨模様でしたが、一湖、二湖をめぐる地上遊歩道を散策し、利用調整地区のシステムを学びました。事前レクチャーなど現地を運営する担当者からは、詳しい現状と課題をお聞きしました。



ゼミ (11 日、12 日夜)

まとめとワークショップの導入・進め方

チームごとに 1 日のまとめ、振り返りを行ったほか、「現場で学ぼう 知床の課題解決にチャレンジ!」と題したワークショップをスタート。意見やアイデアを出し合いながら、敷田先生のレクチャーと各講師のアドバイスを受け、提案作成に向けた基礎を考えていきました。



知床実習 2 日目 (9 月 12 日)

2 日目午前は、岩尾別川流域でサケマスの遡上や流域環境、改良された河川工作物（ダム）を見学し、森・川・海の繋がり的重要性を学びました。また、サケマスの遡上河川に訪れるヒグマと人との問題を現場で考えました。

実習 4 河川生態系の復元（岩尾別川流域）



知床の中央を流れる岩尾別川。改良されたダムの前で、ト部先生が、魚類保護の効果などを詳しく解説しました。森・川・海のつながりがより深く感じられた現場となりました。



ヒグマの気配を感じつつ、足元に気をつけながらの散策でした。雨がちらつく天気でしたが、みずみずしい森の雰囲気を感じ取ることができました。

実習 5 ヒグマとの共存－2（岩尾別川流域）



サケマスが遡上する岩尾別川にはヒグマが姿を見せ、カメラマンや観光客が集まって問題になっています。現場を歩き、石名坂先生から対策の難しさをお聞きしました。



散策途中に落ちていたヒグマの糞から、個体識別のためのサンプルを採取する様子を見学。受講生はみな興味津々でした。

実習 6 関係機関・担当者聞き取り



知床世界遺産センター
(環境省 ウトロ自然保護官事務所)



知床森林生態系保全センター
(林野庁 北海道森林管理局)

2 日目午後は、実際に知床の保全管理業務にあたっている 4 つの関係機関を訪問し、ヒグマと観光客の問題や生態系の復元など、いろいろなお話を伺いました。



知床自然センター
(公益財団法人 知床財団)



ホテル知床
(斜里町役場 環境課)

知床実習 3 日目 (9 月 13 日)

実習 7 サケの河川遡上・サケ漁について (ペレケ川・ウトロ漁港)



(左) ウトロ市街を流れるペレケ川で、カラフトマスの遡上や産卵床を見学しました。ウトロ漁港では野別先生からサケ漁についてお話を聞きました。

(右) ウトロ市街地に張り巡らされたクマ柵を見学。観光客の散策路や通学路も守られています。

演習 1・2 ワークショップ

4 つのチームごとに、知床の課題解決のための提案作成に取り組みました。夜のプレゼンテーションに向けてチーム内で議論し、講師陣のアドバイスを参考に、集中してパワーポイントの作成に取り組みました。



オープンキャンパス (北こぶし ホテル&リゾート)



プログラムの最後は、会場を移してオープンキャンパス(成果発表会)。4 チームから、講義・実習を経てまとめた提案の発表があり、受講生同士や町民の方々との意見交換も活発に行われました。

ヒグマと人との共存が多くテーマになりましたが、「ヒグマ館の設立」「遺産地域に入る前のレクチャー受講の拡大」「VR や神の目線カメラを体験できる施設」「鮭まつりの開催」など提案内容は多岐にわたりました。



講師講評をいただき、参加者の投票でベストプレゼンを決定。

記念品贈呈や受講生代表への修了証授与を行い、和気あいあいの雰囲気の中で、全プログラムが終了しました。



知床ネイチャーキャンパス 2019 の実習フィールド



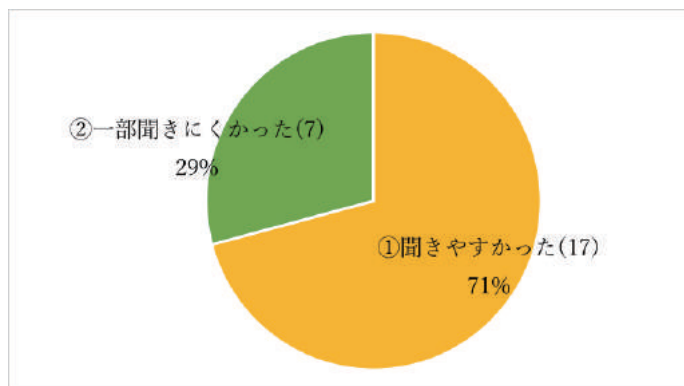
図中記号	実習施設	対応機関	担当分野
遺	知床世界遺産センター	環境省(自然保護事務所)	河川生態系復元 森林保全と利用管理
森	知床森林生態系保全センター	林野庁(森林管理局)	世界遺産地域管理 国立公園利用管理、野生生物保護
自	知床自然センター	公益財団法人 知床財団	ヒグマ管理・運動地管理 普及啓発ほか現地業務
町	斜里町環境課(ホテル知床にて)	斜里町(総務部環境課)	知床100平米運動 ヒグマ管理対策ほか自治体の業務

図中記号	利用施設	利用内容
A	ホテル知床	講義室・宿泊
B	北こぶし ホテル&リゾート	オープンキャンパス

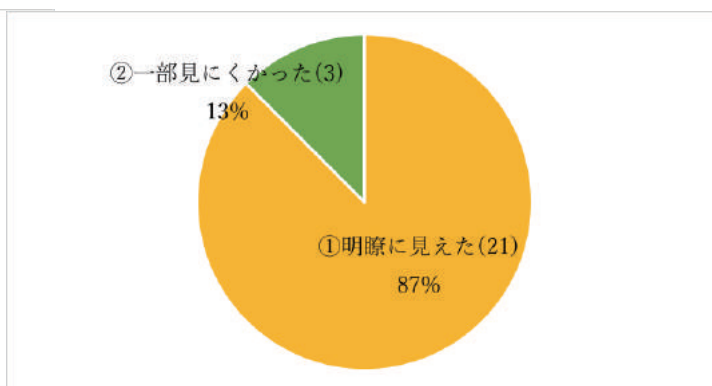
参加者からのアンケート結果より

本年も参加者 24 名（学生 22、社会人 2）全員からアンケートのご協力をいただきました。各項目の集計結果や自由回答から、今後のネイチャーキャンパス実施に向けたヒントや貴重なご意見を得ることができました。

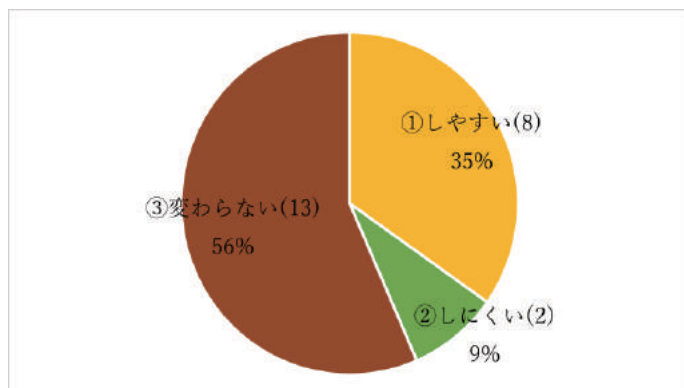
オンライン講義の講師の音声について



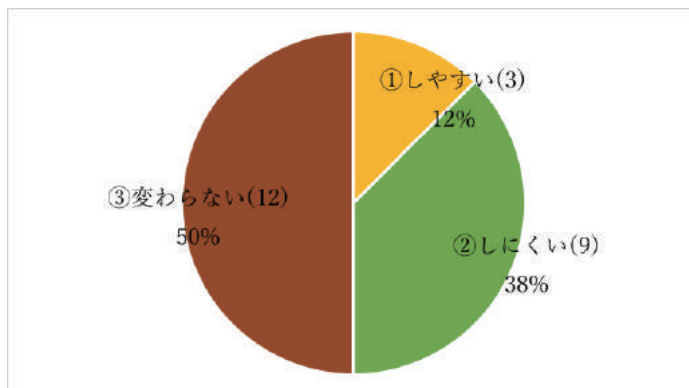
オンライン講義のパワーポイントについて



一般の講義と比べた理解のしやすさ



一般の講義と比べた質問のしやすさ



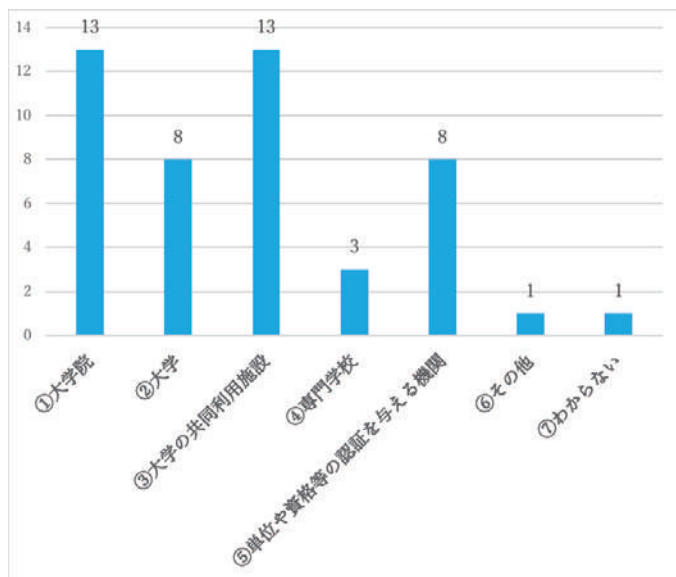
オンライン講義の音声について、聞きやすかったが 7 割。一部聞きにくかった人の聴講場所は関係ないようで、それぞれのネット環境によるものと思われます。パワーポイントについては、ほとんどの人が明瞭に見えたという回答でした。

講義内容の理解については「しやすい」と「変わらない」で 9 割。しやすい理由は「同じ画面上で複数の情報（地図など）を確認できる」「パワポが見やすく、声も聞きやすい」「どこでも受けられる」でした。一方しにくい理由は「流れがあるため一箇所

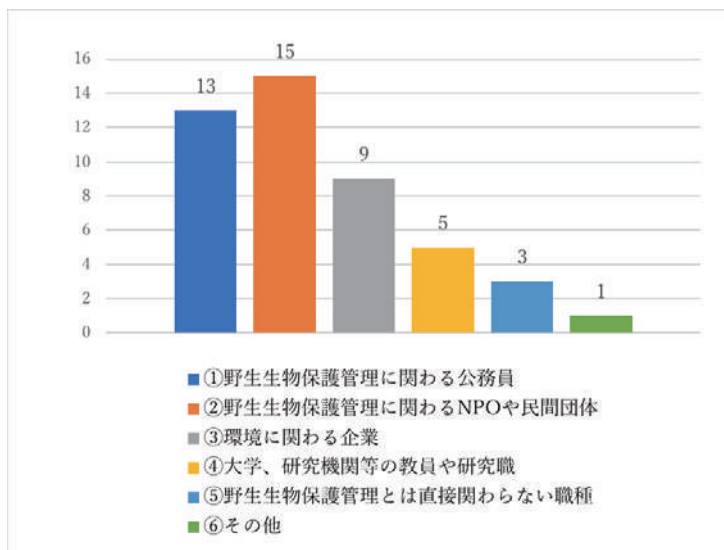
わかりにくくなると他がわかりにくくなる」「受講生同士同じ教室を共有している感が薄い」でした。

質問のしやすさは「変わらない」が一番多いが、「しにくい」が 4 割。理由は「タイミングが分からなかった」「全面に顔が映るのが恥ずかしい」「できれば講義終了後に、皆を待たせないで個別にしたかった」「オンラインは他の人もみるという強制さが伴うため聞きづらい」など。逆にしやすいと感じた理由は「一般の講義だと講師との距離によっては質問がしづらいが、オンライン講義では物理的距離を感じづらいため」でした。

設立を目指す教育機関は何が適していると思いますか？



今後どんな進路を希望していますか？



設立を目指す教育機関に適しているもので、最も多いのが①「大学院」と③「大学の共同利用施設」で13、次いで②「大学」と⑤「単位や資格等の認証を与える機関」が8と回答がばらけました。ちなみに昨年（2018年）の参加者は、「大学の共同利用施設」が15、「単位や資格等の認証を与える機関」が13で、今年と同じように高い回答でした。今回も参加者のほとんどが学生だったことから、学ぶ主体としてどのような姿が適当かを、真剣かつ現実的に考えた結果だろうと考えます。

今後の進路については、「野生生物保護管理に関わるNPOや民間団体」と「野生生物保護管理に関わる公務員」が多く、「環境に関わる企業」「教員や研究職」が続きました。すでに地方自治体から内定をもらっているという回答も。その他の1人は「裁判官」でした。近年のネイチャーキャンパス参加者は理系ばかりでなく、文学部など文系で野生生物と人との関係などを専攻する学生も多く、進路の幅も広く捉えられていると思われます。

自由回答欄の声から

全体を通しての感想は概ね好評で、「知床の自然だけでなく、知床で頑張る人たちを見ることができて、その方々から知床の魅力を教えてもらって知床が大好きになりました」「さまざまな学年、専攻の中でのディスカッションはすごく意味のあるもののように感じた」「さまざまな職業の方にインタビューする貴重な経験ができた」「とても濃い3日間、知床で起きることと同様のことが他地域でも起きていたと思ったので、今回の経験をどこかで生かしたい」などの声がありました。

初めてのオンライン講義については、「思っていた以上にやりやすかった」「事前に先生方や受講生の顔が

わかってよかった」「受講する場所に迷った」「ネット環境がうまく整わず少し戸惑った」とさまざまな声がありました。

また、今回は学生が多かったこともあり、2017年に続いて参加した受講生からは「社会人にも同じように参加し続けてほしいと思った」「社会人がもっと多くいれば、学生にとって刺激になると思う」との声がありました。

あと具体的な要望として、オープンキャンパスについて、「時間が足りない」「質疑応答の時間が短く、地元の方の意見をもう少し聞ければよかった」との声が多く、来年以降の課題としたいと思います。

日本学術会議公開シンポジウム ～持続可能な野生動物管理システムの構築と人材養成～

シンポジウム
傍聴報告

2019 年 12 月 3 日 日本学術会議講堂（東京都港区）

主催：日本学術会議課題別委員会「人口縮小社会における野生動物管理のあり方の検討に関する委員会」

今回のシンポジウムは日本学術会議の課題別委員会の集大成であると同時に、関係各部門（行政・研究者・民間）が連携を深めつつ、それぞれの部門がどのように具体化を進めていくのかのスタートになります（鷲谷委員長の挨拶）。内容は盛りだくさんで、この傍聴記録はそのごく一部であり、別途公開されることを期待します。また、講演者が何度も引用した学術会議の環境省への「回答書」は、学術会議の下記 URL に掲載されています。

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-k280.pdf>

主催者挨拶：山極 壽一・日本学術会議会長（京都大学総長）

「人口縮小社会における野生動物管理のあり方」は日本が抱える未来の一番重要な課題。大いに議論してください。

来賓挨拶：鳥居 敏男・環境省自然環境局長

数十年前はシカを保護するのが課題で、今日の事態を予測できなかった。今後の 50 年を考えながら取り組む。学術会議回答書の 5 つの提言をトータルに受け止める。

講演 1 「日本型野生動物管理システムの提案」

：梶 光一（副委員長、東京農工大名誉教授）

国土レベルから市町村・集落までのそれぞれの空間スケールに応じた統合的管理、広域管理組織・管理ユニットの設置、計画・管理と連携が必要である。猟友会、省庁・都道府県・市町村の各レベル間の補完性原則、自助・共助・公助、アニマルウェルフェアが重要。そのためにも野生動物管理専門員、鳥獣専門職員の配置などが重要であり、人材養成までを実現できなければシステムは構築できない。

講演 2 「兵庫県における野生動物管理システム」

：横山 真弓（幹事、兵庫県立大学教授）

兵庫県では、2000 年から野生動物管理体制の検討開始、野生動物のモニタリングや必要な体制を検討し、2007 年に森林動物研究センターを開設。人口は瀬戸内海沿岸の限られた都市に集中しているが、広大な中山間に農業集落が 4500 カ所あり、糞塊密度調査を毎年、継続的に実施。生息動向が推定でき、対策として何を行うか、管理方針の転換期はいつかなど、野生動物管理に必要な判断が可能になってきた。

講演 3 「島根県における野生動物管理システム」

：金森 弘樹（島根県中山間地域研究センター農林技術部、鳥獣対策科長）

鳥獣専門員を嘱託として 5 名（女 4、男 1）を採用している。県外からの応募がほとんどで、2015 年からは正職員として採用開始。累計 8 名、うち 3



名は嘱託から。県内ほぼ全域に配置できた。専門教育を受けた人材が欲しい。林業職の部局なので鳥獣対策だけでよいのか、人事システムとして検討している。

講演 4 「小諸市の野生鳥獣管理対策」

：竹下 毅（長野県小諸市農林課野生鳥獣専門員）

北大博士課程を出たが、平成 23 年に嘱託として採用され年俸 300 万円、社宅を条件にしてもらった。その後正職員となったが、正職員を採用するにあたっては、どのような人物が来るのかわからないので、当初、議会の反対など厳しかった。しかし猟友会の減少などで有償ボランティア活動では限界があった。平成 27 年に実施体制を組み直し、猟友会メンバーも個人単位で参加してもらうこととした。専門員の役割はコーディネーター。鳥獣の管理より、人間のコントロールが重要。コミュニケーション能力が求められる。

<リレートーク&討論>

「科学的野生動物管理へ：学術からの展望」

コーディネータ：湯本 貴和（京都大学霊長類研究所・教授）

1 「農山村の持続性の視点から」

：小田切 徳美（明治大学教授）

問題なのは「誇りの空洞化」＝諦めに転化しやすい。本来日本の集落には強靱性があるが、あるとき突然臨界点となる。インパクトは主に①災害、②獣害、③政策変化のいずれも外的要因である。そこで多自然型低密度居住地域を提案する。新しいコミュニティ、行政用語では地域運営組織。総合性、補完性、革新性。「回答」が提起している、コーディネーター人材は、リーダーというより、フォロワーと考えたほうがよい。

2 「野生動物管理にかかわる人材育成と配置」

：鈴木 正嗣（幹事、岐阜大学教授）

医療、教育、土木などはそれぞれの専門の教育を受けていて、それと同様とすべきである。1、養成する人材像を明確にし言語化。2、その体制の構築、3、人材の送り出し先(就職先)の確保が必要である。公共性・専門性の高い教育分野ではコア・カリキュラムが定められている。コミュニケーション能力、まず相手の意見を聞くファシリテーターとしての能力も必要。分野は応用科学である。

3、「野生動物の資源利用における衛生管理」

：高井 伸二（北里大学獣医学部教授）

牛・豚・ニワトリは飼育の段階から家畜伝染予防法や飼料安全法などの法律がある。屠殺場では獣医師が健康であることを確認している。一方、野生動物は無主物で、誰がどのように安全性を確保するかが問題。欧米は管理規定、日本はガイドライン。北海道ではエゾシカ協会が平成 19 年から取り組み、平成 28 年には北海道が認証制度と、先進的取り組みをしている。

「回答の政策化にむけて」

：川越 久史（環境省自然環境局鳥獣保護管理室長）

5つの提言に対して、以下の点を実施・検討すると述べられました。

- 1、人材登録事業を進める。平成 30 年で 144 名。活用できていない。
- 2、地域資源として、ジビエ利用支援に予算も付けた。
- 3、包括的土地利用。自然再生推進法、エコツーリズム推進法は現状やや停滞気味。見直しが必要。
- 4、科学的データ収集・分析。情報収集システム、広域管理は現状不十分。データベースとしてはまだ機能していない。
- 5、専門職人材はまだ着手できてない、今後の課題。今回の日本学術会議からの 5 つの提言を次期生物多様性国家戦略と鳥獣保護管理法改正に反映させたい。

閉会の挨拶

：鷲谷 いづみ委員長（中央大学理工学部教授）

今後何をなすべきか方向性は明確になった。課題別委員会は解散しても学術会議には関連の各種分科会で引き続き議論するとともに、委員だった各人の役割は重要。各関連部門の連携・協力と活躍を期待します。

<傍聴の感想>

日本学術会議の講堂は演台から半円形に座席が広がる立派な国際会議場スタイルでした。冒頭の山極会長の「日本の未来が抱える重要な課題」という一言が強いインパクト。来賓の鳥居氏「5つの提言をトータルに受け止める」との表明は、梶講演「人材養成まで実現できなければシステム構築は完成しない」に符合し、繋がっていきます。中身の濃いシンポジウムでした。当財団は「提言」の非常に重要な部門を担っています。事業のステップアップが喫緊であると痛感しました。

（理事・家村充尋）

第 25 回「野生生物と社会」学会

テーマセッション 04 「野生動物管理体制を支える教育プログラムを創る」

学会参加
報告

2019 年 11 月 22～24 日

金沢星稜大学稲置記念館 B21（星稜フォーラム）

第 25 回「野生生物と社会」学会が 11 月に石川県金沢市で開かれ、人材養成について議論がありました。この学会には大学教員・研究者・院生のほか実務者も多数参加しており、当財団の中川元・業務執行理事も参加しました。セッションの詳細は学会誌等に発表されると思いますので、ここではどのような講演と議論があったかについて、ごく簡潔に紹介します。

■ テーマセッション 04 「野生動物管理体制を支える教育プログラムを創る」■

（企画者 池田敬：岐阜大学、森元萌弥：Wildlife Service Japan、横山真弓：兵庫県立大学）

① 趣旨説明 - 野生動物管理の体系的な教育の必要性

（梶光一：東京農工大学）

学会会議の回答の要点は高等教育機関の中にコアカリキュラムを設置して、専門的な職を担える人材を作ると言うこと。37 都道府県の鳥獣担当職員 4361 名のうち専門職は 3.4%、学位取得者はわずか 1.3%。市町村の配置は 3 カ所のみ。学会会議の提言はスタート地点であることなどを指摘されました。

② なぜコアカリキュラムが必要か？

（鈴木正嗣：岐阜大学）

鳥獣行政の現場の実態について問題点を指摘。現場実務には関連の教育課程を納めた行政職員が当たるべきで、高度専門職業人の養成が必要。なにをどう教育するのかを言語化するのがコアカリキュラムであること、野生動物管理学に必要な基盤となる科目、社会科学的な観点からのマネジメント能力の教育、などについて考えを述べられました。

③ 酪農学園大学野生動物学コースのカリキュラム

（伊吾田宏正：酪農学園大学）

酪農学園大学が 8 年前に設置した野生動物学コースについて、そのポリシーと科目、身につけるスキルなど、「ワイルドライフラー」を育てるカリキュラムを紹介。カリキュラムと資格の連携として「鳥獣管理士」と「シカ捕獲認証」があり、イギリスの制度をモデルにした後者では捕獲現場で実習を行っている。各学年の科目や民間との連携など、総合的な教育プログラムについてお話がありました。

④ 知床ネイチャーキャンパスの実施

（中川元：知床自然大学院大学設立財団）

私からは、専門職に望まれる能力とその養成に必要な「現場教育」のプログラムについて報告。具体的な実習フィールドや講師、関係機関との連携、「課題」を取り入れたプログラムや住民との交流などについて、実施例をもとにお話ししました。

「野生生物と社会」学会とは・・・野生生物と人との多様な関係性を対象とする幅広い学問分野のプラットフォームとなり、野生生物と人との問題解決のために、野生生物と社会に関する自然科学、社会科学、人文科学あるいはこれらを横断する学術研究ならびに実践的な知見や議論の成果を、速やかに学界のみならず広く社会に示すことを役割とする学会です。

⑤教えてほしかったこと、教えてもらえなかったこと (横山実咲：栃木県庁)

大学で野生動物保護管理を学んだ後、行政職についた経験から、専門職として必要な知識、学ぶべき内容についてお話しがありました。問い合わせの多い捕獲や狩猟に関しては法律や手続きに関する知識が必要、モニタリング調査方法やデータの活用法に関する知識も重要なことなど、体験に基づいたお話しがありました。

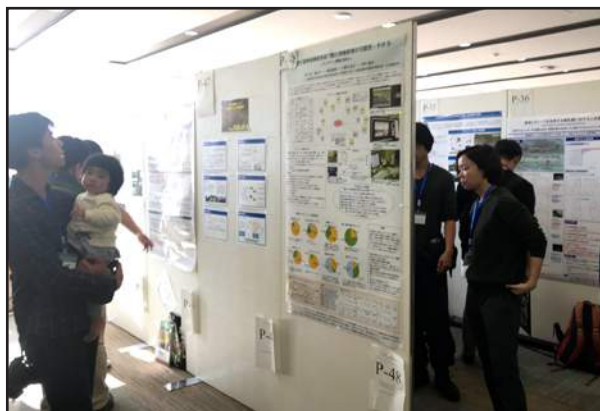
⑥総合討論「教育プログラムを創ろう」 (横山真弓、森元萌弥、池田敬、ほか)

最初に横山さんから兵庫県の野生動物管理の教育について、兵庫県立大学と森林動物研究センターとの関係や、行政職員対象の実習、大学院生の教育についてお話しがありました。出席者アンケートの集計結果が報告された後、企画者・講師と出席者の間で質疑応答と意見交換。社会的ニーズと鳥獣職ポストの確保、科学的な行政官、法制度の課題、認証機関や資格制度、政治との関係、市町村の現状、研究成果と社会実装、学会の役割、等々幅広く有意義な議論が展開されました。

<感想>

社会的ニーズがあり人材が求められている。学びたい人・その道に進みたい人もいる。しかし、人材養成の仕組みが無くてポストも無い。この現状を何とかしたいという、参加者の熱い思いが伝わるテーマセッションでした。

(報告 業務執行理事 中川 元)



この学会では、今年の知床ネイチャーキャンパス・オンライン講義についてのポスター発表も行いました。

■ 知床ネイチャートーク (Winter Talk) を開催します

2020年1月、当財団業務執行理事の中川元(元知床博物館長)が知床の自然と歴史を語る「知床ネイチャートーク」のWinter Talkを、斜里町ウトロの2つのホテルで開催します。2019年8月に行ったSummer Talkでは30~50人の観光客や地域住民にお集まりいただきました。今回は流氷や冬の動物、世界自然遺産登録の理由や野生動物と人を巡る知床の課題、当財団の活動内容などをお話します！

<開催日・場所>

2020年1月24日(金) 知床第一ホテル
2020年1月26日(日) 北こぶし知床 ホテル&リゾート
各回とも20時より約1時間
参加無料・申込不要
宿泊者以外の方も、自由に参加できます。



2018年夏の知床ネイチャートークの様子

札幌シャチの会（知床自然大学院大学設立財団を応援する市民の会）

■ リレーセミナーと講演会のお知らせ ■

札幌シャチの会は、「知床に学ぶ地球の未来 2019」と銘打って、3月までセミナーと講演会を開催します。参加無料。札幌圏の方、大歓迎です！会場はいずれも札幌エルプラザ（札幌市北区北8西3）です。

第3回

日 時：2020年1月22日（水）18:30～
テーマ：知床の歴史 保護の歩みと現況
講 師：神山和義

第4回

日 時：2020年2月26日（水）18:30～
テーマ：教育現場フィールドとしての知床
講 師：上野雅樹

特別講演

日 時：2020年3月28日（土）14:00～
テーマ：「知床の可能性と役割を考える」
講 師：中川元

お問い合わせ・お申込み：上野雅樹
(ueno.masaki@goo.jp) まで

活動を支援して下さる **賛助会員、寄附金** を募集しています

■賛助会員とは

この財団の目的に賛同する個人・団体・法人が会費を通じて支援するものです。

■会員の年会費 ※年度ごとの納入となります。

個人会員：5,000円
団体会員：10,000円
法人会員：20,000円
法人特別会員：100,000円

■加入申込み方法

「申込書」と「郵便振替用紙」をご使用ください。これらは当財団ホームページからプリントアウトできます（入金 は右記口座への入金でも受付しています）

■賛助会員の特典

当財団のニューズレターや絵はがき、講演会やネイチャーキャンパス等の案内情報をお送りします。

■寄附金について

寄附金も随時募集しています。賛助会員加入同様にお申し込みください。

■主な入金口座について

ゆうちょ銀行 記号 19940（普）10138691
（※他の金融機関から 店名九九八 番号 1013869）
北洋銀行斜里支店 店番 452（普）3119440
北海道銀行斜里支店 店番 904（普）0530326
網走信金斜里支店 店番 003（普）0284957
大地みらい信金羅臼支店 店番 003（普）1072873

設立財団ニューズレター 第19号

発行 公益財団法人知床自然大学院大学設立財団
〒099-4117 北海道斜里郡斜里町青葉町 28-10
TEL 0152-26-7770 FAX 0152-26-7773 E-mail sizendaigaku@wine.plala.or.jp
Web <http://www.shiretoko-u.jp>

発行日 2019年12月27日